

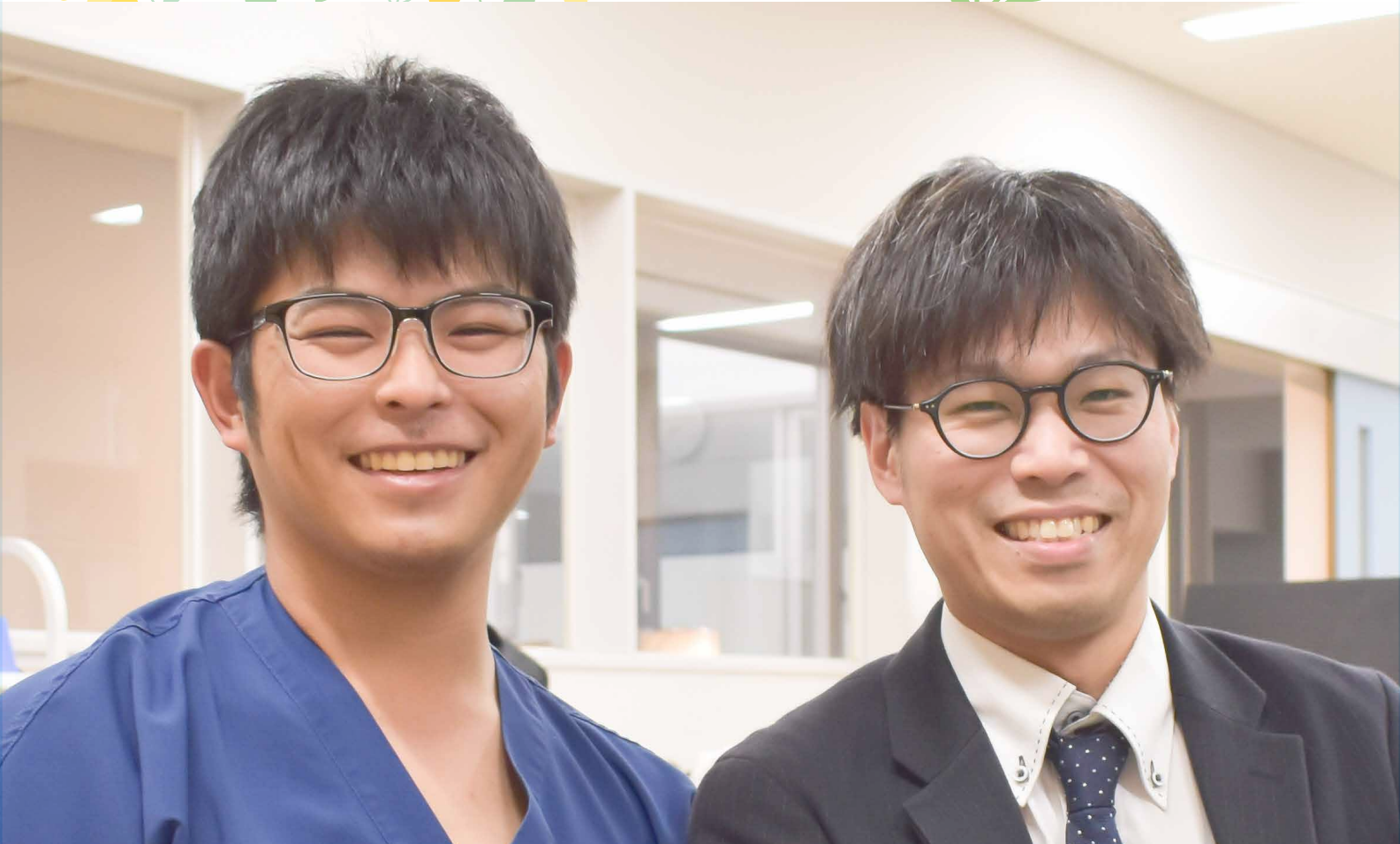
Mihara Memorial Hospital

vol.20

春号

発行月 令和8年4月
発行責任者 院長

ひろせの風



— 春号のテーマ —

- デジタルでつくる、人と向き合う時間
当院が目指す「人にやさしい医療DX」の現在と未来
- 病院DX対談
患者さんの「安心」をデジタルの力で支える。美原記念病院が挑むDXの真意。

無料Wi-Fi

病院内で
使用できます



Free Wi-Fi



公益財団法人 脳血管研究所
美原記念病院
Mihara Memorial Hospital



デジタルでつくる、人と向き合う時間

本院が目指す「人にやさしい医療DX」の現在と未来

安心を支える、本院のしくみと工夫

「DX」とは、安心して医療を受けていただくためのしくみです

「DX(デジタルトランスフォーメーション)」とは、病院のいろいろな場面を支える新しいデジタルのしくみを活かして、病院のしくみや流れを見直し、よりよい医療につなげていく取り組みのことです。本院では、受付や会計だけでなく、記録、院内の連携、診断を助けるしくみなど、さまざまな場面で見直しを進めています。こうした取り組みは、安全な医療を支え、患者さんへの説明やケアにより丁寧に向き合えることにもつながります。一方で、新しいしくみにより、患者さんに慣れない操作をお願いする場面もありました。そのため本院では、安心して医療を受けていただけることも大切にしながら進めています。

20年前から少しずつ進めてきた、安全と安心のための工夫

本院のデジタルの取り組みは、2004年の電子カルテ導入から始まりました。医師が患者さんの顔を見ながらお話しできるよう、キーボードを見ずに入力する練習を重ねたことも、その一歩でした。ここでは、近年の動きをご紹介します。

最近の主な取り組み

- 2022年 ●………… マイナ保険証対応 / RPA（事務自動化）導入
事務負担を軽減
- 2023年 ●………… 自動精算機・再来受付機の導入
待ち時間を短縮
- 2024年 ●………… 順番案内モニター設置 / 電子処方箋 / インカム導入
連携と情報共有を円滑に
- 2025年 ●………… マイナ診察券対応 / AI画像診断の導入
早期発見を支援
- 2026年 ●………… 電子カルテ生成AI導入
活用を開始

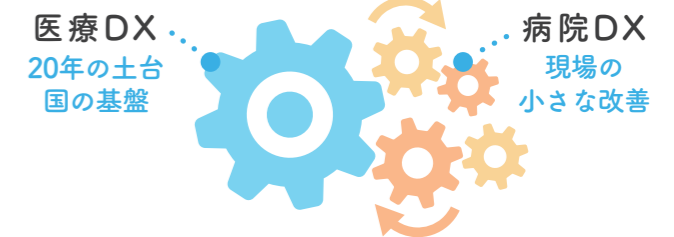
話題の「生成AI」を
本院でも活用し
始めています

本院では、生成AIを試しながら活用し始めました。生成AIは、聞いたことに答えたり、文章の下書きを作ったりする技術です。ただし、AIが作る文章には、間違いが含まれることもあります。そのため、必ず職員が内容を確認しながら使っています。

よりよい医療を支える、現場の工夫とスタッフの声

新しい仕組みだけでなく、現場の工夫でよりよい医療へ

左ページでご紹介したように、本院では、自動精算機や電子処方箋など、新しい仕組みを少しずつ取り入れてきました。ただし、こうした仕組みは、入れるだけで十分に効果が出るとは限りません。本院では、国の制度や機器の導入を進める「医療DX」だけでなく、現場の動き方や仕事の流れを見直す「病院DX」にも取り組んでいます。この二つの取り組みが噛み合うことで、よりよい医療につながっていきます。実際に行った現場での工夫は、医療分野の学会でも発表しています。



学会で発表した本院の取り組み

第65回 全日本病棟学会	第66回 全日本病棟学会	第27回 日本医療マネジメント学会学術総会
外来の待ち時間を短縮	病棟ケアを中断しない	業務の負担を減らす
自動精算機 × 動線の見直し	連絡用インカム × 探す時間の削減	自動化システム × 人間が判断
自動精算機の導入にあわせ、患者さんの動線も見直しました。その結果、会計までの流れが整い、待ち時間短縮につながりました。	連絡用の機器（インカム）の導入でスタッフを探す時間を減らし、患者さんのそばでのケアを続けやすい環境をつくりました。	「定型作業は自動化システム（RPA）、複雑な判断は人間」と役割を分ける工夫を専門誌でも紹介し、スタッフの時間を生み出しました。

デジタルでつくる、人と向き合う時間

新しい仕組みで安全と安心を支え、現場の工夫で人に寄り添う医療を大切にする。それが、本院が目指す「人にやさしい医療DX」です。その仕組みを現場で活かし、よりよい医療へつなげていくことが、病院DXへとつながります。

現場のスタッフが動き始めています！

次ページからは、機器や制度を整える「医療DX」から、その先の「病院DX」へとつながる現場スタッフの対談をご紹介します。新しい仕組みを、患者さんの安心と、よりよい医療のためにどう活かしていくのか。その工夫や思いをお伝えします。



詳しくはP4・5 スタッフ対談へ！ →

病院DX対談

患者さんの「安心」を
デジタルの力で支える。

美原記念病院が考えるDXのかたち。

当院では、患者さんにより安心して医療を受けていただくために、DXに取り組んでいます。ここでは、その中心となる職員が、現場で大切にしていることを語ります。

DXで大切なのは、新しい仕組みを入れることだけではありません

鶴井 近年、医療業界でも「DX」という言葉をよく聞くようになりました。まず、当院が考えるDXについて、玉城先生から教えていただけますか。

玉城 はい。DXは、単にデジタル機器を導入することではありません。D（デジタル）はあくまで手段であり、本質はその先のX（トランスフォーメーション）、つまり「変える」ことにあります。今の医療現場では、人手不足をはじめ多くの課題があります。そうした中でも質の高い医療を続け、地域のニーズに応えていくためには、これまでの仕組みを見直し、抜本的に変えていく必要があるのです。

鶴井 当院ではこれまでも、電子カルテや電子処方箋、自動精算機、マイナンバーカードの保険証利用などを進めてきましたが、それらもDXの一環といえるのでしょうか。

玉城 そうですね。それらは一般に「医療DX」と呼ばれ、大きなシステムや機器を導入し、それに合わせて病院の体制を整えていくもので

す。一方で、今私たちが力を入れているのは「病院DX」と呼ぶべき、より身近な取り組みです。これは、大きなお金をかけるのではなく、日々の業務の中にある小さな「不便」を、自分たちの知恵と身近なデジタルツールで解決していく、現場の改善活動だと考えています。

鶴井 つまり、院内の仕組みを整える「医療DX」と、現場で工夫を重ねる「病院DX」の両方があるところ、患者さんの安心につながるということですね。

玉城 その通りです。最新のシステムを導入するだけでは解決できない細かな困りごとが、現場にはたくさんあります。それを私たち自身がデジタルの力も借りながら解決していくことで、組織の文化そのものをより良い方向へ変えていきたいと考えています。

研修を通じて得た新しい視点

鶴井 その変革の担い手として、看護師の近藤さんと相談員の設楽さんには、SUNABACOのDX人材育成講座を受講していただきました。お二人にとって、DXへの印象はどのように変わりましたか。



玉城 駿介
脳神経内科
医師



鶴井 慎也
データ管理課
課長



設楽 多貴
連携室
相談員



近藤 菜々美
看護部
4階病棟看護師

近藤 受講前は、デジタルといえば「AIなどに任せて何かを作るもの」だと思っていました。しかし、研修を通じて学んだのは、技術よりもまず「考え方」でした。「なぜ今困っているのか」を細かく分けて、本当の問題を見つけ出すこと。その上で、AIツールなども活用しながら自分の考えを整理し、周囲に伝わる形にすることです。デジタルは魔法の道具ではなく、自分たちの考えを整理し、業務改善に生かしていくための力になる、と気づかされました。

設楽 私も同じように、当初はデジタル化や機械の導入こそがDXだと考えていました。しかし、解決策は必ずしもデジタル化だけではないという気づきが、私にとって大きな収穫でした。大切なのは、大きな目標を掲げるだけでなく、まずは小さなところから改善を試み、その結果を見ながら次の方法を考えることです。この「小さく始めて、柔軟にやり直す」という姿勢は、日々の業務課題に向き合ううえで、とても大切だと感じています。

患者さんのための時間をどう生み出すか

鶴井 お二人は現在、その学びを活かして、実際に現場での改善に取り組まれていますね。その内容は、患

者さんにどのような形で返ってくるのでしょうか。

近藤 私は現在、ケアスタッフによる「物品管理業務」の効率化を検討しています。夜勤中に、ケアスタッフが病棟を回って在庫を確認する業務の大変さを見て、そこを少しでも改善できないかと考えるようになりました。この負担を軽くすることで、ナースコールへの対応や、患者さんへのより手厚いケアにつながる時間を生み出したいと考えています。事務的な作業をデジタルの力で効率化し、人だからこそできる「人と人との関わり」や「信頼関係づくり」に力を注ぐことが、医療現場におけるDXの姿だと考えています。

設楽 相談業務では、患者さんやご家族との「面談」のあり方を見直しています。これまでは複数の職種が個別に面談を行うことで、患者さんに同じことを何度もお聞きしてしまう負担がありました。そこで、事前に確認できる項目はアンケートなどで情報を集め、共有する仕組みを整えようとしています。こうした工夫によって、面談にかかる時間や待ち時間を減らすことが期待できます。ただし、面談の時間をただ短くするのが目的ではなく、限られた時間の中で、より大切なお話に集中できるようにするためです。これにより、患者さんの待ち時間や「また聞かれた」という負担を減らした

いと考えています。

鶴井 面談時間が短くなることで、かえって「話を十分に聞いてもらえなくなるのではないか」と不安に思う方もいるのではないのでしょうか。

設楽 私たちの目的は、形式的な確認作業を効率化することにあります。書面やアンケートで確認できることは先に整理し、そこで生まれた時間を、患者さんが今どのような不安を感じ、どのようなご希望をお持ちなのかといった、直接対話すべき部分により多く使いたいと考えています。

鶴井 単に効率化するのではなく、形式的な確認にかかる時間を減らすことで、患者さんの思いや不安に寄り添う時間を増やしていくことですね。

医療の質を支える患者さんのためのDX

鶴井 玉城先生、こうした現場の「病院DX」は、病院をどのように変えていくのでしょうか。



玉城 病院には、その役割上、多くの書類作業や事務作業があります。しかし、DXによってこうした負担を軽くできれば、医師や看護師が患者さんと向き合う時間をより多く確保できるようになります。そうして生まれた時間を患者さんに返していくことが、医療の質を高めることにつながると考えています。

鶴井 事務部門が業務を効率化し、

現場の事務負担を減らすことができれば、医師や看護師は、より患者さんのそばでの仕事に力を注げるようになります。そうした時間を患者さんに返していくことが、当院の目指す姿なのですね。

テクノロジーを温かみのある医療の力へ

鶴井 今後、病院全体にこのDXの考え方を広げていくために、どのようなことが大切だとお考えですか。

玉城 大切なのは、一部のチームだけで進めるのではなく、現場で課題を感じているさまざまな職員が参加し、改善を続けていける雰囲気をつくることです。今回の対談に参加した近藤さんや設楽さんのような存在が、それぞれの現場で実際に取り組みを進め、その大切さを示していくことが、病院全体に広がるきっかけになると考えています。

近藤 言葉だけでなく、実際に「患者さんのためになった」という実感を積み重ねながら、周囲の職員も巻き込んでいきたいです。

設楽 デジタルが苦手だった私たちが取り組む姿が、他の職員にとっても一歩を踏み出すきっかけになれば嬉しいです。

玉城 私たちが進めるDXは、医療の温かさを損なうものではなく、むしろそれを守るための手段です。デジタルの力を上手に活かしながら、これまで以上に患者さん一人ひとりに寄り添い、地域に根ざした質の高い医療を続けていきます。

鶴井 こうした取り組みを、患者さんの安心や笑顔につなげていけるよう、病院全体で進めてまいります。本日はありがとうございました。

株式会社「SUNABACO」主催
DX人材育成講座の様子はこちら

講座の
成果発表会に
参加！



詳しくはこちら➡

事務部長就任の ご挨拶

このたび事務部長を拝命いたしました北岡です。身に余る光栄であるとともに、その責任の重さを改めて感じております。当院は脳卒中医療を中心とした急性期医療を担い、地域の皆さんの健康と安心を支える医療機関として重要な役割を果たしてきました。医療を取り巻く環境は大きく変化しており、人口構造の変化や医療制度改革など、医療機関には柔軟で持続可能な運営が求められています。そのような中で、医師、看護師、医療技術職、事務職など多職種が連携し、それぞれの専門性を生かしたチーム医療を実践していくことが重要です。事務部門として現場を支え、職員の皆さんが安心して力を発揮できる環境づくりに努めながら、地域に信頼される病院づくりに貢献してまいります。



事務部長

北岡 円

令和8年3月に就任

業務を行ううえで 大切にしていること

これからの医療機関において、職員一人ひとりが組織に誇りややりがいを持って働く「エンゲージメント」の向上は非常に重要です。医療の質や患者さんへのサービスは、現場で働く職員の意欲や働きやすい環境に大きく影響されます。そのためには、職種や部署の垣根を越えたコミュニケーションを大切にし、互いの役割や専門性を理解し合いながらチームとして医療を提供していくことが必要です。また、安心して意見を言える風通しのよい職場環境や、職員が成長を実感できる環境づくりも重要です。事務部門としても現場の声に耳を傾けながら

業務改善や環境整備に取り組み、職員が誇りとやりがいを持って働ける病院づくりを支えていきたいと考えています。

皆さまへ

病院は多くの職種の職員が協力し合うことで成り立っています。それぞれが専門性を発揮し、互いを尊重しながら連携することで、より質の高い医療を提供することができます。事務部としても現場を支える立場として、皆さんとともに働きやすく活力ある病院づくりを進め、地域医療への貢献を果たしていきたいと考えています。



連携医紹介

当院では地域のかかりつけ医との連携強化に努めています

Q1. 患者さんと接する時に意識されていることは？ Q2. 先生の『モットー』は？ Q3. 地域の皆さんへメッセージを！

木の温もりと
スタッフのやさしさが
あふれる空間で



院長
牧岡 幸樹 先生

趣味：サッカー

こまがた脳神経内科・内科クリニック

診療科目

■内科 ■脳神経内科

- Q1.** 患者様とご家族の想いに寄り添い、対話を通じて最善の治療を共に考えます。木のぬくもりを感じる空間で、心通う医療を大切にしています。
- Q2.** 『患者さんご家族も納得のいく全人的医療の提供』患者さんやご家族との対話を重ね、疾患だけでなく背景にある暮らしまで配慮したケアを心がけています。一人ひとりに最適な治療と予防を届け、共に健やかな未来を目指しています。
- Q3.** 地域の皆さまに寄り添い、認知症や脳卒中などの早期発見・早期治療に取り組んでいます。これまでに学んできた最新の治療も地域へ届けられるよう、地域に根ざしたクリニックを目指しています。

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
9:00～12:00	○	○	○	○	○	○	—
15:00～18:00	○	○	○	—	○	—	—

休診日

■木曜午後
■土曜午後
■日曜 ■祝日

お問合せ先

住所：〒375-2122 群馬県前橋市駒形町1074-1 TEL：027-226-5046
URL：https://www.komagataneurology.jp

病める心に
安らぎと笑顔を。
高齢者の身体に活力を



センター長
湊 崇暢 先生

趣味：温泉

執筆（第20回読売
ヒューマンドキュ
メンタリー大賞
入選（テレビドラマ
化）など）

群馬県認知症疾患医療センター原病院

診療科目

■精神科

- Q1.** 「袖振り合うも多生の縁」とは、道ですれ違う程の小さな出会いも大切にすべきという仏教の言葉です。患者さんというよりも、一人の人との出会いとして大切に扱うよう心がけております。
- Q2.** 『生きる、その実体は瞬間にしかない』これは岡本太郎さんの言葉です。認知症の方やそのご家族が、その瞬間に笑顔でいる、笑顔で毎日を過ごせることを願って、日々診療に取り組んでおります。
- Q3.** 当院は認知症疾患医療センターの委託を受け、2026年で15年間が経過しました。これもひとえに美原記念病院はじめ、地域の先生方、認知症に関わる全てのスタッフの皆様方の支えの賜物です。今後も皆様方の知恵と力をお借りして、時代に即した新しい取り組みを行いながら、患者様やご家族の「笑顔づくり」ができれば幸いです。

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
外来（初診・再診） 9:00～12:00	○	○	○	○	○	○	—

休診日

■日曜
■祝日

お問合せ先

住所：〒370-0127 伊勢崎市境上武士898-1 TEL：0270-74-0633
URL：https://hara-hospital.jp

4月11日は「世界パーキンソン病デー」 4月は「パーキンソン病月間」です

4月11日は、パーキンソン病を研究した英国の医師ジェームズ・パーキンソンの誕生日にちなんで「パーキンソン病デー」と制定されました。4月はこの病気への理解を深め、啓発を行う「パーキンソン病月間」とされています。



パーキンソン病は
早期診断と早期治療が鍵！
詳しくは広報誌にて紹介しています。

広報誌「ひろせの風」
Vol.12 春号 P4 ~ P5 掲載



パンフレットは外来の
患者さん相談窓口
設置のラックにござ
います。お手にとつ
てご覧ください。



外来や各病棟に
設置しています



外来



病棟

QRコードを読み込んで 当院スタッフへ ご意見をお寄せください



以下の手順より回答をお願いします

スマートフォンからQRコードを
読み込んでください



当院へのご意見をお寄せください
皆さまからのお声が
当院スタッフの励みになります



お問合せ先

公益財団法人 脳血管研究所 **美原記念病院**

〒372-0006 群馬県伊勢崎市太田町366 <https://mihara-ibbv.jp>

TEL : 0270-24-3355 FAX : 0270-24-3359 E-mail : mihara-hosp@mihara-ibbv.jp

